

〈患者を生きる：1859〉35年間、ついに限界



足のこぶが気になり、学校行事にはロングスカートばかりはいていた(野地さん提供)

■ 血管の病気 下肢静脈瘤：4

ふくらはぎの上部やひざの裏にゴツゴツと浮き上がって消えない青いこぶ。福島県二本松市の野地扶美子(のち・ふみこ)さん(60)は、2人目を出産した35年から足の「ボコボコ」に悩んできた。

痛みはなく、医者に行くほどではないと考えていた。だがとにかく、見た目が悪かった。同居中の義父母らの目が気になり、家の中でもひざ下が見える服は着られなかった。礼服はパンツで、結婚式に呼ばれたときはロングスカートで通した。

当時、家では養蚕を営んでいた。春から秋はカイコの世話などで忙しく、農閑期の冬場は派遣社員として近くの電機部品組み立て工場で働いた。いすに座っての作業もできたが、部品が手に届きやすいため、一日中立ったままの作業が続いていた。

養蚕をやめた15年ほど前、工場での仕事を、フルタイムに切り替えた。症状は徐々に悪化。痛みやかゆみも出て、血が出るまで、足をかきむしり、皮膚は変色した。治したくても、どこに行けばいいのかわからず、そのまま放っておいた。

5年前、コレステロール値の経過観察のため、通っていたかかりつけ医に訴えろと、皮膚科を紹介された。皮膚科では心臓血管外科の受診を勧められた。手術も必要だという。「手術なんて、怖い」。そう思い、心臓血管外科には行かなかった。

しかし、昨年3月の東日本大震災をきっかけに、更に症状は悪くなっていった。

6年ほど前から勤めていたヘルメット製造工場に注文が殺到し、週休1日の激務になった。朝8時から夜7時まで、昼の休憩時間の約40分以外は、ずっと立ちっぱなし。トイレに行き、便座に座るとホッとするぐらい、足を休ませる時間が待ち遠しかった。休日は横になっていないと、疲れがとれなかった。

秋に入り、ようやく覚悟を決めた。「手術を考えるので、病院の紹介をお願いします」。かかりつけ医に駆け込んだ。

「専門的な治療ができるのは、東北地方なら数えるほどしかない」。近くでは、JR仙台病院(仙台市)と福島第一病院(福島市)の二つの名前が挙がった。自宅から車で40分ほどで行ける福島第一病院を選んだ。

昨年12月、病院を訪れた。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright ©2012 The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.